

私のメソポタミア考古学

松本 健*

Pioneer Seminar: My Challenge to Mesopotamian Civilization

Ken MATSUMOTO

本稿は2021年6月12日(土)、オンラインにて開催された日本西アジア考古学会『パイオニアセミナー』の記録をもとに、編集委員会が編集したものです。

『西アジア考古学』23号編集委員会

1. イラク西南沙漠、アッターール洞窟の発掘調査

私が最初にイラクに渡航したのは、1972年10月16日でした。JALで、当時「中東のパリ」と呼ばれたベイルートを経由して、イラクのバグダードに到着しました。イラク西南沙漠にあるアッターール(Al-Tar)洞窟遺跡の発掘調査団は藤井秀夫教授を団長として、榊原吉郎(美術史)、牛木久夫(水文学)、河名俊男(地理)、竹村利之(建築史)、松本健(考古学)といったメンバーからなり、海外協力事業団OTCA(現在のJICA)の専門家派遣事業で調査を行いました。アッターール洞窟は、藤井秀夫教授が1969年にイラクを訪問した際に発見しました。それが人工的に作られた洞窟だということを証明しようという目的で調査が始められたのです。

我々はバグダードに着くと、日本から送っていた機材と車を南イラクの港町バスラまで引き取りに行くことになりました。10月23日夕方7時に、調査隊員および大使館書記官と一緒に旧英国製列車でバグダードを出て、朝5時にバスラに到着しました。バスラの税関でランドクルーザーの新車を引き取って、私が運転し、クートの町近くまで来た時でした。前の大きなトレーラーを追い抜こうとしたところ、運悪く後輪がパンクしてしまいました。トレーラーに吸い込まれるようにして接触しそうになったので、道路の反対側に思い切りハンドルを切ったところ、路肩に突っ込み、車が2、3回転してしまいました。

私は転がりながら「今からというときに、何てことだ!」と思いました。同乗した誰もが思ったことでしょう。同乗していた竹村さんは肩を脱臼して、近くのクートの病院に入院することになってしまいました。車のフロントガラスは吹っ飛び、ボンネットは壊れてしまったのです。幸いほかの人は無傷でしたので、皆でひっくり返った車を起こし、タイヤを換えて、なんとかバグダードまで運転していきました。その後1か月ほどして、竹村さんが退院し、車の修理も終わったので、その車でカルバラに行き、宿舎を設営

して、12月によろやく発掘ができる状態になりました。

アッターール洞窟というのは、シーア派の本山であるカルバラから、西の沙漠に約30km行ったところにあります。南北に走る断崖がガクンと落ちたところに、ひと際目立つ島状のアッターール洞窟が聳えています。この周辺には、大小多くのワディ(涸河)が西のアラビア半島から流れ込んでいます。その水がこの崖にぶつかって、バハル・アル・ミルフ(ラザーザ湖)と呼ばれる塩湖に流れていきます。

12月ごろ、空は晴れているのに、アッターール洞窟に最も近いワディ・ウバイドで鉄砲水に遭遇する経験をしました。このワディを渡っていたトラックが流されるほどの勢いのある水でした。アラビア半島で雨が降り、それが沙漠の中のワディ・ウバイドを流れて、イラクの西南沙漠までやって来たのです。村の女性や子供達は声を高々に鳴らして喜んでいました。水を壺に入れて、飲み水として使っていたようです。

アッターール洞窟A丘は巨大なビルのように大きく、高さ30m、東西の長さ80m、南北の幅50mもありました(図1)。その下層は砂岩でできています。その上は、薄いピンク色または白色の泥灰岩の層で、そこに洞窟があります。地表に近い上層は、石膏



図1 アッターール洞窟と藤井秀夫団長とその仲間(1975年)

* 国士舘大学イラク古代文化研究所

The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University

西アジア考古学 第23号 2022年 157-166頁 © 日本西アジア考古学会

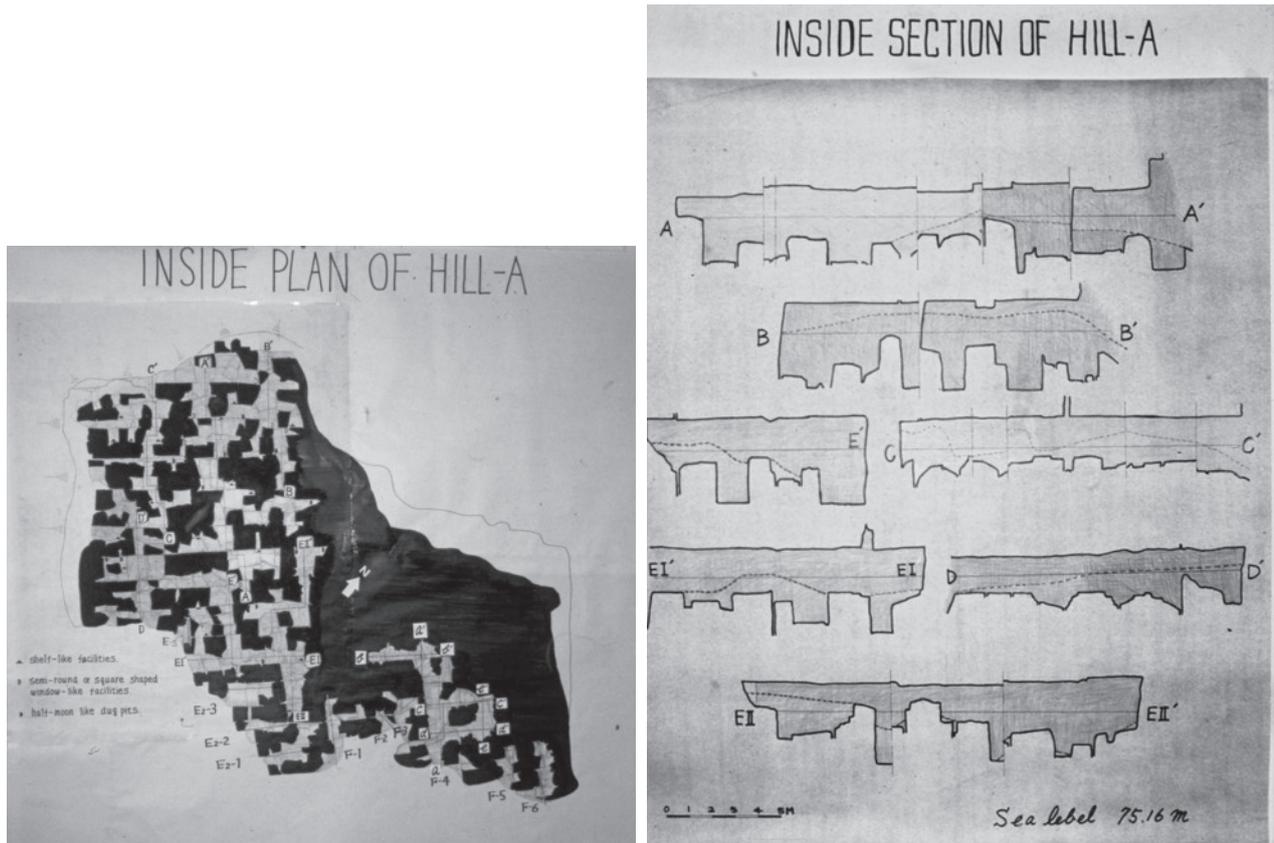


図2 アッターール洞窟 A 丘の平面図と断面図

と泥灰岩の互層になっています。洞窟は泥灰岩の層に、下 (A~E2 グループ) と、一段高いところ (F グループ) に網の目のように掘り巡らされていました。

アッターール洞窟 A 丘の中の状況については、平面図また断面図を見るとよくわかります (図2)。第一次調査 (1971年3月~10月) では A、B、C、D、E1 グループを発掘し、第二次調査 (1972年10月~1973年6月) では E2-1、E2-2、E2-3 そして F-1、F-2、F-3 のグループを発掘しました。また第三次調査 (1973年9月~1974年3月) では、F-4、F-5、F-6 という洞窟を発掘しました。発掘調査では 10 人程度の作業員とともに大量の泥灰岩の破片を掘り出しましたが、洞窟の深い底で舞い上がる砂塵は、口にタオルを巻いた程度で防げるものではありませんでした。

洞窟のあちこちに掘削時の泥灰岩の破片が堆積していたのですが、そのなかからこれといった遺物は出土しませんでした。ただ、F-4 洞窟の入り口の近くから、埋葬された遺体が織物に包まれた状態で発見されました。F-6 洞窟からも、同様に織物が発掘されています。少なくとも、この洞窟が掘削された後の時代に、埋葬に利用されたことがわかったわけです。しかし、洞窟が墓に利用されたことはわかったものの、本来、この大規模な洞窟は、なんのために掘られたので

しょうか。要塞説や墓説、材料利用説など諸説考えられましたが、少ない遺物からはなかなか証明できませんでした。

これまで A 丘の洞窟を調査してきましたが、その背後の崖面にも同様の洞窟がたくさん掘られていました。そこで、どのようなタイプの洞窟が、どのような理由で掘られているのか調べるため、洞窟群の分布調査をしました。一つずつ洞窟の中に入り、平面図と断面図を作って調べました。

そのなかの典型的な例を紹介します。A 丘の背後にある東側の崖面、B 丘、C 丘、D 丘にも、泥灰岩層にクラックが走っていて、そのクラックに沿って人が伏せてやっと入れるくらいの小さな洞窟が掘られているのを多数確認しました。それらは、掘られて間もなく放棄されたか、若い洞窟ということになります。その次のタイプは、最初小さな洞窟でしたが、だんだんとそれが大きくなって部屋のような状態になった洞窟です。さらに、大きな洞窟の奥壁に、小さな穴が掘られている状態の洞窟も確認されました。このようなことが繰り返され、だんだんと奥へ、左へあるいは右へと、クラックに沿って洞窟が掘られていき、A 丘のような巨大で複雑な構造を持つ洞窟になっていったということが調査によってわかってきました。

小さな洞窟のクラックの奥のほうにもコウモリが棲んでいました。コウモリは毎年やってきて、数ヶ月この洞窟に棲み、大量の糞を残して立ち去ります。このコウモリの糞は現在でも肥料に用いられています。洞窟が徐々に大きくなっていったことを考えますと、コウモリが棲みやすいように、またコウモリの糞を集めやすいように、この洞窟が徐々に削られ、造られていったと考えられます。現在でも、ナツメヤシの葉で作った箒が売られているのですが、これはコウモリの糞を集める際にも使用されています。実際に洞窟からもナツメヤシの葉が出土していて、年代測定をしてみると紀元前1000年ぐらいまでさかのぼるものもありました。

したがって、コウモリの糞を集めるという作業が紀元前1000年ごろから行われ、それが繰り返されることで、洞窟が徐々に拡大していき、コウモリにとっても棲みやすい洞窟になったということです。洞窟が大きくなると、お墓にも利用されるようになりました。実際、そのような墓が多数、発掘されたわけです。放射性炭素年代測定を行いますと、何らかの形で洞窟が継続的に使われていたことがわかりました。紀元前後には、お墓として利用されていますが、それ以外はコウモリの糞採集とか、あるいは一時的に休むところとして使われたり、手が加えられたりを繰り返していったと思います。

第二次調査が終わり、調査団員が帰国した後も、私は現地に残って遺物の整理などをしていました。この滞在でイラクの気候、人々の生活、遊牧民などの様子がようやくわかったように思えます。そして、1年半の滞後、1973年6月に帰国しました。イラク行きを紹介していただいた国士舘大学文学部考古学研究室の大川清教授に帰国の挨拶をしたとき、大川先生からは日本の考古学の道に戻ることを勧められましたが、私は藤井秀夫教授のもとでイラクの考古学を学ぼうと決めていました。そして、1973年9月5日に、再びアッタール洞窟に戻ったわけです。

第四次調査（1975年5月～1976年3月）の際に、墓の典型的な例として、C丘のC-17洞窟を発掘しました。入り口近くの床が一番高くなっていて、奥に進むと、ドンと深く落ちていました。そしてその床面がまた高くなったところに、奥の洞窟を塞ぐために砂岩石が積まれていました。その奥の洞窟では最下層の底に泥灰岩の破片と砂層が堆積し、その上に人が埋葬され、入り口が閉塞されていました。その後、入り口が壊されて埋葬品は盗掘され、放棄されていました。

この発掘によって洞窟は埋葬のためではなく、それよりもずっと以前に、造られたものであることがわかりました。洞窟で埋葬が行われるまでの間に、1000年以上の月日が経過している場合もありました。

C-17洞窟では、一回目の埋葬が行われると、次に来た人が、前の被葬者を脇に寄せて、別の被葬者を屈葬状態で葬ったこともわかりました。そこでは砂の上にゴザを敷いて、その上に絨毯を三つ折りにして置き、その上に白い布で巻かれ紐で結ばれた遺体が葬られていました。被葬者の上には羊などの皮革製品もかぶせられていました。これまでは、墓が荒らされ人骨も破損していたため埋葬の全容が解からなかったのですが、この例でアッタール地域の埋葬方法がはっきりとしました。また、洞窟の分布調査によって、ほかにも（C-12洞窟やC-16洞窟など）墓として利用されている洞窟があることもわかりました。

洞窟から出土した織物の中には、ローマ時代の神々を描いたパッチワークを縫い付けたものがありました。これらは非常に優れた綴れ織り技法で織られたもので、3世紀末ごろに遡るローマ時代の技術の高さを示しています（図3）。このほかにも、H形、Γ（ガンマ）形と称しているシンボルあるいは葡萄唐草紋、幾何学紋など色々な模様を持ったものや、あるいは一畳ぐらいの大きな布などが出土しています。

イラク西南沙漠でこれだけの織物が発掘されたこと



図3 埋葬された遺体を覆っていた布に縫い付けてあったワッペン（女神像）

は、大変貴重な発見であったと言えます。普通、メソポタミアのテル型遺跡の発掘では、有機質の物が出土することはほとんどありません。しかし、洞窟には一年中変わらず適度に気温や湿度があり、2000年前のものとは思えないような鮮やかな織物が残されていたのです。こうした織物はパルミラ (Palmyra) やドゥラ・ユーロポス (Dura Europos)、ハトラ (Hatra) といった遺跡の壁画にも描かれており、藤井先生はこういった西方地域との関係が強いのではないかと述べていました。私も、バル・コホバ (Bar Kokhba) というイスラエルにある洞窟から出土した織物の模様と非常に類似していると考えています。アッタール洞窟で見つかった織物のデザイン、とくにH形、Γ形の紋様などは、貝紫で染めた貴重なもので、宗教的に高い身分の人たちが使ったものと言えます。こうしたものが実際にアッタール洞窟に埋納されていたということが驚きです。聖者と呼ばれるくらいに身分の高い人たちが、アッタール洞窟周辺、おそらくクセイル (Qusair) などに住んでいて洞窟に埋葬されたと考えています。

そのほかに耳飾りや指飾り、首飾りといった副葬品が、わずかですけれども出土しています。土器も量は非常にわずかですが、紀元前1000年ぐらいのものと紀元前600年ごろの新バビロニア時代のもの、イスラム時代のものに分けられます。洞窟を一時的に仮の住居あるいは見張り場として使ったときの物が含まれていると思います。

私が注目した遺物は、紀元前600年頃の新バビロニア時代の完形の土器2点です。このような完形品がなぜアッタール洞窟に埋っていたのでしょうか。シュメール学者の吉川先生の研究報告を参考に考えたのですが、新バビロニアの最後の王ナボニドゥスは、アラビア半島にあるタイマ (Tayma) というオアシス都市に赴き、そこで10年間も滞在しました。それほど、タイマというオアシスの街を気に入ったわけです。私はバビロンからタイマへ向かうときに、最短経路であるワディ・ウバイドが利用され、その際に休憩場所や見張り場などとしてアッタール洞窟が使われたと推測しています。紀元前6世紀ごろの新バビロニア時代には、アラビア半島とメソポタミアを結ぶ物資の交易ルートが確立していたのです。中期アッシリア時代の紀元前1000年ごろの土器片も、アラビア半島とメソポタミアの間で行われた交易、あるいは争いが起こった際などに洞窟を一時的に利用したことを示す遺物ではないかと想像しています。

2. ハムリン盆地のテル型 (遺丘) 遺跡の発掘調査

アッタール洞窟の調査を進めるなかで、イラクの古

代文化を調査研究するためには、恒久的・専門的な研究所が必要だとして、藤井秀夫先生が尽力し設立されたのが、国土舘大学イラク古代文化研究所です。藤井秀夫教授 (所長)、川又正智講師、そして私、松本健助手からなる研究所で、1976年3月に鶴川校舎に発足しました。

その翌年の9月、アッタール洞窟の第五次調査をC-16洞窟で行うため、私はいつものように先発隊として一足先に出発しました。まず、バグダードでイラク文化遺産総局のムアイヤッド・サイード・ダメルジ長官 (Dr. Muayad Said Damerji) に挨拶に向かいました。文化遺産総局に着いたところで、ケンブリッジ大学のポストゲイト教授 (J. N. Postgate) にお会いしたところ、突然、「ハムリンの発掘調査をやった方がいいよ。あそこは誰も発掘していない未知の世界で、なおかつ東西南北の交差点だから重要な場所だよ」と言って去って行かれました。最初はなんのこともよくわからなかったのですが、ダメルジ長官から「アッタール洞窟の発掘はそろそろ終わりにしていいのではないか。メソポタミアの本格的な大きいテル (遺丘) を発掘したらどうだ」と言われました。びっくりして、感激のあまり心臓がときめきました。その場ではなんとも言うことができず、藤井先生に早速、電報を打ったわけです。結果的には、メソポタミアのテル遺跡を発掘することになりました。ハムリン盆地にダムができるので、水没遺跡の救済のための発掘することになったのです。

アッタール洞窟のC-12やC-16洞窟は、その後、2シーズンにわたり発掘を継続しました。一方で、私はハムリン盆地に移り、水没範囲にある遺跡を探索し、発掘するテルを選び、その周辺の状況を調べ始めました。この発掘調査はいわゆる行政発掘で、自らの研究テーマをもとにして行う発掘調査ではないことから批判もありました。しかし、我々若い考古学徒にとっては、メソポタミア文明の遺跡の発掘ができる喜びでいっぱいでした。

ハムリン盆地は、イランとの国境に近い場所です。バグダードからディアラ川沿いに北東に約150km上流に、ダムが建設されるということでした。その地域で発掘するというので、車に器材などをいっぱい積んで、まずは遺跡の探索を行いました。すでにイタリアやイラクの調査団が入り、遺跡の発掘調査やその準備をしていました。このような経験豊富な調査団から色々教えていただき、水没地域内を探索して選んだのが、テル・グッバ (Tell Gubba) という遺跡でした。

グッバの遺跡の近くには、廃村になったヌーリアミンという村がありました。その中の一軒を修復して、イラクの調査団から借りたテントを中庭に張りま

した。電気も水もなかったので、オイルランプを買い、飲料水は町から汲んできて生活を始めたのです。この点が、イタリア隊などの欧米隊と違うところです。彼らは、まず、長期的な生活ができるように電気や水道、店が近くにある好条件の場所を選び、生活の拠点としていました。遺跡は生活の場に近いところ、つまりダムが完成しても水没するかしないかくらいの地点の遺跡を選んで、調査するということでした。我々はそれとは対照的にまず遺跡を選んで、生活は二の次というような考え方でした。

何よりも、メソポタミア文明を調査できる、テルを発掘できるという喜びの方が大きかったです。新しい調査メンバーとともに、1977年からダムの水が来るまで、ほとんどぶっ通しで3年間発掘をしました。その間、私はラマダーンに挑戦したり、A型肝炎にかかったりしながら、なんとか健康を保ちつつ調査を継続したわけです。

ハムリン盆地は、クルドの人たちが多く住んでいるところであり、アラビア語、クルド語が飛び交っていました。また、ハムリン盆地の調査には、発掘オリンピックと言われるぐらい欧米各国のチームが参加していました。各調査団の交流が盛んにおこなわれ、私にとって非常に新鮮な国際的な学术交流の場となりました。

ハムリン盆地には、北からディアラ川、西からナリン川が流れ込んでおり、その交差する地点にハムリンダムが造られる予定でした。そのダムに最も近いところに、テル・グッバ、ソングル (Songor) A、B、C、ハメディヤート (Hamediyat) という遺跡があります。

テル・ソングル A、B、C は表面調査によって、古い時代の文化層しかないことがわかっていました。テル・ソングル A では紀元前 6000 年ごろのサマッラ期の建物や墓が地山の上から出てきました (図 4)。サマッラ期に特徴的な 4×3 列構成の建物が、ソングル



図 4 サマッラ期の彩文土器

A では少なくとも 7 軒出土しました。集落はその周りを日干し煉瓦で作った分厚い壁で囲まれていました。続く紀元前 5400~5300 年ごろのハラフ期のものとして、ソングル A からは墓、ソングル B からは住居が出土しました。なお、サマッラ期とハラフ期の間には、時間的なギャップがあったようです。

ハラフ文化はサマッラ文化の後に北メソポタミアに広がった文化で、ソングルはハラフ文化圏の南端に位置し、南側から徐々に北上してくるウバイド文化と接触して、ハムリン盆地独自のハラフ文化とウバイド文化が融合した文化を作り上げていたようです (図 5)。ハラフ文化とウバイド文化が接触することによって、ウバイド文化が徐々に受け入れられ、やがてウバイド 3 期の文化がハムリン一帯を占めるようになり、それから北メソポタミアへと拡散しました。ウバイド 3 期の痕跡としては、ソングル A で墓、ソングル B で土器製作の窯、ソングル C で住居が確認され、ウバイド文化がハムリンで栄えていたことがわかります。

ウバイド 3 期には、テル・アバダ (Tell Abada) 遺跡に代表されるように、同じようなプランの建物から集落が構成されています。サマッラ期とは異なり集落を取り囲む壁は無くなりますが、集落のなかに中心的な建物が出現するという点が大きく異なっています。我々が発掘したテル・ソングルでは、サマッラ文化、ハラフ文化、ウバイド文化という文化の接触や変遷を確認できたことは大きな成果であったと思います。

テル・グッバはテル・ソングルのすぐそばにあり、我々が最初に選んだ遺跡です。ここからは、ジェムデット・ナスル期 (紀元前 3100 年~紀元前 2900 年) の 8 重もの壁で造られた円形の建物が地山の上から出土しました。建築班の復元によると、ドーム天井になっていたようです。ハムリン盆地でとれた小麦などの穀物をここに集めて貯蔵し、また、穀物の栽培、収



図 5 ハラフ期からウバイド 3 期への移行期の土器



図6 テル・グッバ7層出土の円形建物

穫を司る神々を祀る神殿のような機能を合わせ持っていたと考えています。しかし、ジェムデット・ナスル期の遺構は、この広いハムリン盆地の中でグッバからしか出土していません。これが南のジェムデット・ナスル文化の都市国家のもとで建造されたものなのか、それともイランの影響下でこういった大建造物が造られたのか、大きな問題が残っています（図6）。

ジェムデット・ナスル期の円形建物も、次の初期王朝時代に破壊され、その跡に倉庫または小さな神殿のようなものが造られました。南のシュメールの人たちの勢力が及んでいたということが、遺構や遺物からわかりました。

1979年の12月にハムリングダムが完成しました。水が日に日に遺跡や宿舎に近づいてきて、私たちは一晩かけて必死に遺物や生活用品を移動させたことを覚えています。グッバ遺跡で発掘した厚い日乾煉瓦の壁を持った遺構も、ひたひたと迫り来るダムの水によって少しずつ抉られていき、ついにはドッと壊れました。その崩れ去る大建造物を見たとき、なんとも言えない寂しさと同時に、終わったという達成感を感じたのを覚えています（図7）。

3. ハディーサダムとエスキ・モースルダムの水没遺跡群の発掘調査

ハムリングダムが完成し、発掘が終了するやいなや、

イラク政府から、ユーフラテス川中流域のハディーサ地区にもダムを建設するので、水没する遺跡の調査の要請がありました。発掘する遺跡を選ぶため、1980年9月22日にハディーサにあるイラク隊の事務所に立ち寄りました。事務所の椅子の上に小さな携帯ラジオが置いてあり、そこにちょうどイラクの文化遺産総局の職員の人たちがぞろぞろと集まってきました。

ラジオでイラン・イラク戦争が開戦したことを知りました。ハムリンからハディーサに向かうとき、道路の片側に戦車を載せた大きな運搬車が長い列を作っていたのは、イランに侵攻するためだったのです。その後、戦争は8年も続き、我々の知人にも戦死する人がいました。

イラン・イラク戦争の最中、1981年5月にハディーサでの遺跡の発掘調査が始まりました。ここでは1984年1月までの約3年間、調査を行いました。ユーフラテス川はシリア沙漠の台地を突っ切り、その後、南メソポタミアに流れていきます。ハディーサでは川幅も狭く、氾濫原のうえにある台地はなにもない沙漠となっています。そこで、ハディーサにダムを造り、その水を灌漑用にしよという計画が立てられたわけです。ここでは氾濫原が狭いため、作物の大きな収穫は望めません。それゆえ都市と思われる遺跡はマリなどに限られています。我々が発掘を担当したアブ・ソール（Abu Thor）遺跡やライヤーシ（Rayyash）遺跡などは見張り台や墓などで、遺跡は



図7 テル・グッバ、テル・ソングル遺跡のダム湖水没

単層のものが多かったです。

そのような遺跡の中でオウシーヤ（‘Usiyeh）遺跡では、地下につくられた部屋を発見しました。そこにはメソポタミアの円筒印章や貝殻、色々なレリーフなど貴重な物が貯蔵してありました。また、上部からは床に石膏を貼った神殿のような建物が発掘されました。こうした出土遺構や遺物から、シリアあるいは地中海とメソポタミアとを結ぶ交易路の中継点だったということ、またアッシリアのアッシュルとも交易・交流が行われていたことがわかりました。

ハディーサでの発掘調査を終えて、エスキ・モースル地区に移動しました。エスキ・モースルには、発掘されていない遺跡がかなり残っていました。それらの多くを調査するように要請されたため、遺跡に階段状のトレンチを設け、遺跡の層位の年代を確認していくという調査方法を探らざるを得ませんでした。

エスキ・モースル地区の遺跡では、新石器時代の層やアッシリア時代の層、そしてそれ以外にもミタンニなど様々な民族が勢力を持った時代の層があり、そういった文化層が重なり合って確認されました。

テル・デル・ハル（Tell Der Hall）では無土器新石器時代、ハラフ期、ガウラ期の層を発掘し、ムシャリファ（Musharifa）では、ガウラ期の三列構成の建物など北メソポタミア独特の文化を発掘しました。これらの資料は、ハムリンの新石器時代の資料と比較研究するのに良い資料となりました。テル・フィスナ

（Tell Fisna）とテル・ジガン（Tell Jigan）は巨大な遺跡で、あらゆる時代において拠点であった遺跡だと考えられました。両遺跡では、ミタンニのような北メソポタミアの勢力が拡大した時期の層が確認されました。また、フィスナでは、ヘレニズム時代の文化層が確認され、アレクサンドロス大王の勢力がチグリス川を越えた時の様子を感じさせました。

こうしてハムリン、ハディーサ、エスキ・モースルの水没遺跡を調査する中で、さまざまな時代の文化を学ぶことができました。この間に、ほかの欧米の調査団との交流も盛んに行われ、それがもとになり、在外研究員としてミュンヘン大学の中東考古学研究所に赴き、バーセル・ルーダ教授のもとで研究することもできました。

エスキ・モースルダムの完成によって、イラク政府によるダム建設の計画も一応のめどがつきました。そこで、我々も今後どうするかを考えました。欧米の調査団は、もともと発掘権を有していた遺跡の調査に戻っていきました。我々も、アッタール洞窟の近くにあるアイン・シャーイア（Ain Sha'ia）やドゥカキン（Dukakin）という遺跡で、1986年9月20日から1989年2月までの3シーズンにわたって、アッバース朝時代のキリスト教の教会あるいは僧院の址を発掘しました。アッタール洞窟やアイン・シャーイアの発掘が大方終わると、我々のイラク西南沙漠での遺跡群の研究目的は達成されたように思われました。

4. キシュの発掘調査と日本西アジア考古学会の創設

そこで、今まで行ってきたダム水没遺跡の発掘調査の成果をまとめるとともに、それらの問題点を解決するためにも、メソポタミア文明の中心都市キシュ(Kish)の発掘調査をしたいと、イラク文化遺産総局のダメルジ長官に願い出たわけです。もちろん1920年代に10年に渡ってこの遺跡を発掘したシカゴ大学やアシュモレアン博物館の了承も得て、イラク政府からキシュの発掘許可が出たわけです。

第一次のキシュ調査は1989年11月と12月に2か月かけて行いました。「パレスA」という、初期王朝時代のもっとも古い宮殿がありますが、その西隣が未発掘箇所でしたので、そこを発掘しました。表層からお墓がたくさん出てきました。その下の第1層からは新バビロニア時代の遺構(図8)、第2層からはプラノ・コンベックスでできた壁の建物が出土しました。そのプランは三列構成を持った建物でした。また、プラノ・コンベックスの焼成煉瓦で作られた施設から、聖水で洗うところが中央の間から出てきました。これは初期王朝時代の小さな神殿であると思われます。

キシュ発掘当時すでにイラクのサダム政権とアメリカの関係が悪くなり、中東の緊張は高まっていました。本格的に科研費を申請して第二次調査を実施しようと計画している最中に、イラクがクウェートに侵攻し、1991年1月17日には湾岸戦争が始まりました。さらにその後イラクに対して厳しい経済制裁が13年

間も科せられたことは、我々にとっても大きな問題となりました。私はキシュの発掘調査で申請をして科研費が採択されたのですが、科研費を使うことができない状態が続いたのです。

なかなか思うように発掘調査ができないなか、今までやってきたことをまとめなければいけないと思いました。東京大学や早稲田大学、筑波大学、古代オリエント博物館など、ほかの調査団も中東の各地で発掘調査をしていましたから、それぞれがどこでどういった成果をあげたのか、情報公開していくのが良いのではないかと考えました。

そこで、「西アジア史の研究データベースに関する総合的研究」というテーマで、科研費を申請しました。この計画に江上波夫先生をはじめ、当時西アジア考古学に関係した先生全員に参加していただきました。先生方が書かれた報告書や論文に加えて、そのとき行われていた発掘調査の成果も発表してもらい、データベースを作成しようと考えました。現在、日本西アジア考古学会が実施している西アジア発掘調査報告会は、このプロジェクトで最初に実施したわけです。当時の会場は国土館大学の鶴川校舎でしたが、たくさんの方に来ていただき、西アジア考古学に対する関心の高さがわかりました。

このプロジェクトが3年で終わった段階で、もっと継続的に情報公開をしようではないかと考え、1997年1月11日に設立されたのが日本西アジア考古学会



図8 キシュのJA地区の発掘

です。この学会は皆さんが一丸となって創ったもので、だからこそ今まで続いているのではないかと思います。当時の我々は専門書も研究室に全部あるわけではなかったもので、各大学で持っているものを訪ねては見せてもらったり、話を聞いたりしていました。そういったなかで、欧米の研究者たちにも対抗できるようにしなければいけないと、せめて日本人がやっていることを皆が理解し合えるような学会をつくりたかったわけです。

1998年にはレバノンの考古総局からのベイルート再開発事業の一環として遺跡の救済、修復の協力を日本西アジア考古学会に要請がありました。これを受けて、私は1998年8月20日から1999年2月15日、1999年9月20日から1999年12月5日まで国際交流基金を通じて派遣され、ベイルートでは遺跡の発掘と保存の状況調査を、和田久彦氏とともに北レバノンのアッカー地区では遺跡分布調査をしました。またティールでは高速道路建設に伴う遺跡の分布調査を泉拓良奈良大学教授（当時）らと実施し、高速道路建設計画の変更を提案しました。なおティールの発掘、修復は泉拓良教授らによって継続されました。

さて、キシユの第一次調査は予備調査で、あまり本格的な調査はできませんでした。そこで第二次調査ではもう少し規模を大きくして実施したいと考えていました。しかし、科研費は依然、保留されたままでした。そこで国士館大学の経費で、2000年11月に1カ月という短期間ですが、キシユの第二次調査を試みました。ちょうど一雨降った後に遺跡に来てみると、プラノ・コンバックス煉瓦による建物の一帯に、建物の厚い壁と思われるラインがはっきりと見えたのです。これは少し箒で掃くだけで、すぐに初期王朝時代の建物を見つけられると、すごく興奮しました。

試掘の結果、壁は九重にもなっていました。さらに壁と壁の間を一箇所、深く掘り下げたところ、この壁が3mぐらい立ち上がっていることがわかったのです。底の床の上からは土器の破片が少し出たのですが、その上の厚い層からは何も出土しませんでした。この堆積の状況は、キシユとアッカドの戦争の際、アッカドがユーフラテス川の水をこの町に流し込んだことと関連があるのではないかと、つまり粘土板文書に記された水攻めの結果、厚く泥が堆積しているのではないかと考えました。この一帯を発掘すれば、初期王朝時代末期からアッカド時代のキシユの状況が明らかになるのではないかと想像しました。また、発掘区を拡大すれば、まだ見つかっていないキシユの城壁や、さらにその外側にあったユーフラテス川の古代流路、更にはアッカド帝国の都アガデも明らかにすることができるのではないかと大いに期待されたのです。

第三次調査は本格的にできるはずだと思い、3カ月

の発掘の予定を立てていました。2001年の9月1日から調査を始めました。プラノ・コンバックス煉瓦の大建築物が出てくるかという矢先に、今度は9月11日にアメリカで同時多発テロが起こったのです。そのニュースは、宿舎のコックが持っていた小さなテレビから流れてきました。呆然としていたところ、すぐに大使館と大学から早く帰って来いという連絡が来たので、発掘を中止せざるを得ませんでした。

次の日の早朝に埋め戻しを行い、日本大使館にいったから、文化遺産総局のダメルジ長官に帰国の挨拶をしました。その文化遺産総局の門を出るときに、ボルシッパ (Borsippa) 遺跡を発掘しているオーストリア隊の女性隊長ヘルガ (Helga Trenkwalder) 教授にばったり会いました。「何をしていますのですか」と聞かれたので、「今から帰らなければなりません」と答えたら、彼女から返ってきた言葉が「何言ってんのよ。私は今から発掘するのよ」という一声でした。この違いはいったい何だろうかと考えながら、GMCのタクシーで弾丸道路を11時間かけて、ヨルダンのアンマンに向かい、そこから日本に帰ったのです。

5. イラク戦争と第三国研修

その後もキシユ調査の再開の目処が立たないなか、JICAよりサウジアラビアでの観光に向けた文化遺産調査の依頼があり、2002年1月20日から3月15日にかけて、すでにサウジアラビアの調査研究実績のある川床陸夫氏らの協力を得ながら、辻村純代氏と遺跡の分布調査を行いました。サウジアラビアには広大な沙漠地帯、オアシス、山岳地帯、海岸地帯など変化に富む地形があり、古くは旧石器時代からイスラーム時代に至るまで多種多様な文化が栄えており、エジプト、地中海沿岸、メソポタミアとの交流や交易も時代を通して行われていたことが文化遺産から理解できました。

イラク情勢も落ち着かない日が続き、ついに2003年3月20日にイラク戦争が起こり、その後もキシユの発掘調査をすることはできませんでした。イラク戦争が起こる直前、私のところにシカゴ大学のギブソン教授 (McG. Gibson) から、戦争の中止とイラク博物館への攻撃の中止をブッシュ大統領に要請するので、それにサインをしてほしいと連絡がありました。しかし、戦争は止められず、イラク国立博物館の至宝も掠奪されてしまいました。イラク戦争が終わって間もない2003年5月、6月には、その被害状況を調べるため、メソポタミア文明の専門家ユネスコの調査団が編成されました。私もその調査団員の一人になりました。その後、イラク文化遺産復興支援調整会議 ICC (International Coordination Committee for

the Safeguarding of the Cultural Heritage of Iraq) がユネスコに設立され、ユネスコが中心となってイラクの文化財の修復や保存が進められていきました。

それにともない、日本も支援することになりました。第三国研修としてイラクの人たちをヨルダンに招いて、イラクの文化遺産研修を実施してはどうかという提案が JICA からありました。それに国士舘大学も文化遺産プロジェクトを組んで、協力しようということになりました。そして 2004 年 9 月 26 日から 9 月 30 日、JICA による第三国研修計画セミナーがアンマンにて開催され、ヨルダン考古庁のファワーズ (Fawwaz al-Khraysheh) 長官からウム・カイス (Umm Qais) という遺跡でイラク、ヨルダン両国の文化遺産関係者に研修することを提案されました。その会議が終わって私はすぐに、ウム・カイス遺跡のことを知りたくて、タクシーを飛ばして見に行きました。大きな列柱道路や劇場を持つローマ時代の都市遺跡でした。こういうところで果たして研修ができるのか考えましたが、基本的な考古学の調査方法を用いて、さまざまな関連分野の専門家を招いて研修することに決めました。そして、ウム・カイス遺跡で環境調査、発掘、修復、活用をしながら、研修を進めていくという方法をとったわけです。

イラク文化遺産局員 20 名を対象に、まず 2005 年から 5 年間、その後さらに 2 年間、毎年 2 カ月間、夏に研修を実施しました。当初の 2 シーズンは、ヨルダンの考古庁の職員 5 名も研修に参加しました。研修内容は、基本的な考古学の方法、パソコンを使っての記録、情報整理などでしたが、一方で、最新鋭の機器による測量方法や GIS なども研修しました。この研修で感じたことは、イラク・イラン戦争以後、長い間つねに戦渦にあって、国民も政府も疲弊しているということでした。イラクの研修生はパソコンや最新の技術に大変な興味も持っていました。また、研修生は帰国してから、研修内容を同僚に伝えてくれていたようです。文化遺産研修は順調に進み、研修生は皆、さらにステップアップした研修を望んでくれました。同時に 2005~2010 年には文科省学術フロンティア事業「戦後イラクの社会基盤としての文化遺産学研究」が採択され、イラクの人達に文化遺産復興のための研修をしながら、文化遺産復興のための研究をすることになり

ました。また、イラク古代文化研究所の研究成果を広く公開していくこと、また研究資料の保管収蔵を目的としたイラク古代文化研究所展示室を梅が丘キャンパスに設置した。他方、国士舘大学の学生にも文化遺産の教育・研究をすることが求められ、イラク古代文化研究所と 21 世紀アジア学部と合同でグローバルアジア研究科に修士課程：文化遺産学分野、博士課程：文化遺産学研究科を 2006 年 4 月に設置することになったのです。

ヨルダンのウム・カイス遺跡で我々が発掘した地区(初期ローマ時代の門に隣接する東区)では、下層からローマ時代後期の邸宅址、その上層から集会場のような建物が出土しました。この建物は、放射性炭素年代測定のほか、出土したコインや土器、メダル、あるいは建物内の施設などから 4 世紀前半の初期キリスト教会堂ではないかと考えています。ローマ帝国からビザンツ帝国に時代が移る時に、ここウム・カイス(古代のガダラ [Gadara]) で何が起きたのか知るために、ウム・カイスの発掘調査も続けていきたかったのですが、2015 年 2 月以降に IS の勢力が拡大しました。テロで中東全体が混乱したため、ヨルダンでも調査活動ができなくなってしまいました。さらに、2020 年以降、新型コロナウイルスが世界中に拡散し、自由に渡航すらできなくなっています。今はオンラインで現地と連絡をとることしかできませんが、ウム・カイス遺跡の研究をまとめていくところです。

6. おわりに

世界の情勢は厳しいですが、西アジアの考古学がもっと盛んになるように、陰ながら私も応援できればと思っています。今回お話した内容は、国士舘大学イラク古代文化研究所の藤井秀夫教授を代表として、多くの協力者とともに行われてきた発掘調査の成果に、私の経験と私見を加えたものです。研究の詳細につきましては、イラク古代文化研究所が発刊している『ラーフィダーン』を、またヨルダン、ウム・カイスの調査研究については、国士舘大学文化遺産学研究プロジェクトが発刊している『文化遺産学研究』を参考にいただければと思います。また、写真や図につきましては、国士舘大学イラク古代文化研究所より提供いただきました。